

Buellia (19), *Rinodina* (8), *Pyxine* (8), *Physcia* (24), *Anaptychia* (9); *Dictyonema* (1).

ZAHLBRUCKNER ノ著書ノ以後ニハ彼自身ノ追補ガアリ、上記ノ朱彥丞ノ論文モアルガ、最モ注目スベキモノハ MAGNUSSON ノ大論文デアラウ。コレハソノ採集區域ガ地衣學ノ見テ殆ド處女地ト云フベキ支那ノ邊境ノ地デ、新疆・甘肅・内蒙等ニワタリ 175 種ヲ記録シ、ソノ中デ 112 種ハ新種デアリ残りノ大部分ノモノモ支那トシテハ新發見種デアル。ソノ屬名ト種類ノ内譯ハ次ノ通りデアル。

Verrucaria (1), *Polyblastia* (1), *Staurothele* (2), *Thrombium* (1), *Dermatocarpon* (11), *Endocarpon* (1), *Allarthonia* (1), *Diploschistes* (2), *Psorotichia* (4), *Peccania* (2), *Thyrea* (1), *Collema* (3), *Leptogium* (3), *Heppia* (4), *Lobaria* (2), *Sticta* (1), *Peltigera* (5), *Lecidea* (14), *Cladopycnidium* (1), *Catillaria* (4), *Bacidia* (1), *Toninia* (1), *Rhizocarpon* (1), *Cladonia* (4), *Sporastatia* (1), *Sarcogyne* (2), *Acarospora* (12), *Glypholecia* (1), *Lecanora* (40), *Candelariella* (3), *Parmelia* (3), *Evernia* (1), *Dactylina* (1), *Usnea* (2), *Protoblastenia* (1), *Caloplaca* (14), *Teloschistes* (1), *Buellia* (4), *Rinodina* (7), *Physcia* (4), *Anaptychia* (1).

以上ノ論著ヲ綜合スレバ、支那ニ産スル地衣類ハ 124 屬 800 種以上ガ知ラレテキルコトニナルガ、ソレデモ漸ク我が國トホボ同様ノ數ニ達シテキルニ過ギナイカラ、ナホ今後ノ研究ニ待ツトコロガ多イ。

○かきしめぢノ中毒例 (蒲生 明)

本草ノ毒ノ有無ニ關シテハ未ダニ成書ニソノ決定ヲ見ナイヤウデアアルガ、少クモ當地方ニ産スルモノハ其ノ新鮮品ノ食用ニ際シ、必ズ中毒スルコトヲ私ハ曩ニ雜誌「茸類ノ研究」誌上ニ報告シテ置イタガ、以下報告スル大中毒事件モ實ニ本草ノ毒茸タルヲ證スルニ足ルト思フ(但シ本草ヲ漬ケテ貯ヘ冬季食用ニ供スルコトハ既報ノ通りデアル)。

中毒例。中毒者 福島縣田村郡山根村 農 鈴木 K 氏 (47 歳)、同人長女 M (16 歳)、次女 H (11 歳)、三女 Ha (7 歳)、四女 Ma (5 歳)。

昭和 9 年 10 月 30 日、主人 K 氏ハ附近山林中カラ多量ノかきしめぢヲ採リキタリ晚餐ノ食膳ニ供セリ、食後 2 乃至 4 時間ヲ經テ腹痛、嘔吐ヲ訴フル者續出シ遂ニハ頻々トシテ下痢ヲ起セリ。但シ子供達ハ多量ニ食セザリシタメ其ノ中毒モ稍輕症ナリシモ、主人 K 氏ハ多量ニ食セル爲メ其ノ症狀重ク遂ニハ醫治ヲ受ケ全治迄ニ約 7 日間ヲ要シタリ。ソノ中毒症狀ニツキ K 氏ノ語ル所ニ依レバ、本草ヲベにきゆうしちノ名ノ下ニ味噌汁ニ入レ煮テ食シタルニ味頗ル美ナリシモ食後約 2 時間ヲ經テ惡心ヲ覺エ嘔吐アリ、後腹部膨滿感、鈍痛、腹鳴頻々タル下痢ノ爲メニ身心大ニ疲勞困憊シ言語スルモ難ク、腹中灼熱感ニ惱マサレ四肢ノ指ハ攣縮シテ他ヲシテ身體ヲ起スニ非ラサレバ原狀ニ復シ得ズ、遂ニハ全身ノ筋肉何レモ攣縮シテ如何トモスベカラザル故遂ニ醫治ヲ受ケタルモ胃腸ノ方ハ約 5 日位デ治シ、他ノ筋ツマリハ約 7 日間モ續ケリト云フ。主治醫ノ談「本草ハ胃腸炎ヲ起シ激シキ嘔吐ト

下痢ノ爲メ心臓衰弱シ脈膊不整四肢厥冷、諸關節ノ攣縮ス。コレニ依テ觀ルニ本茸ハ胃腸障害ヲ起シ且ツ神經系統ヲ侵ス或ル毒素ヲ含有スルナラン」ト、同時ニ鈴木氏分家 B 氏一家モ同茸デ中毒セリ。

當地方デハ毒抜ノ方法デ漬ケテ貯ヘ、食用ニ供スルコトハ前述セル所デアアルガ中毒者ノ多イノハ、他ノ茸ニ遲レテ晩秋多量ニ發生スルノト外觀上無毒ラシク見エル爲メ採リテ食ヒ中毒スルノデアアル。上記中毒茸ノ何物ナルカハ私がソノ標品採集ニ約7年間ノ努力ヲ續ケテ昨年該茸ナルコトヲ決定シタ。

はきはきたけ科ノきはきはきたけニ中毒スルコトハ私が「茸類ノ研究」ニ報告シテ置イタガ又はなはきはきたけニモ中毒スルト云フ。きはきはきたけハ煮ルト酸味ガアリ、又はなはきはきたけハ煮ルト粘稠ノ液トナリ中毒スルト一般ニ言ハレテキル。學者方ノ研究ト御垂教ヲ望ム次第デアアル。

○みやまいらくさノ方言 あいニ就テ (松田孫治)

みやまいらくさノ嫩芽ヲ秋田縣ニ於テハ廣ク食用ニ供スル故ニ、春季ハ市場ニモ現レ一東(15 本位)ガる錢位ニ賣ラレテ居ル。當地方デハ殆ンドみやまいらくさノ名ヲ呼ブ者ガナク、短カクテ呼び易イあい・あえ・あいこ・あえこ等ノ方言デ呼稱シテ居ルノデアアル。コノ中デあいガ基本的ノモノデ他ハコレヨリ派生シタモノデアアラウト思フ。コノあいナル方言ガドウシテ出來タモノカニ就テ、水口清報(清)氏が秋田ノ植物ノ中ニ、“この草をとつてアエモノとなし食用にする故「アエノコ」から轉訛してアエー 又はアエッコ となりしか(大久保氏による)。又本縣一帯にアツーといふ場合、アエーと呼ぶ。されば盛夏の候山中でこの植物に生ぜる毒針に觸れて、突然アエーといふ叫聲をあげる故かくは名づけしものか。”ト述ベテキル。又牧野博士ハ日本植物圖鑑第 1934 圖ノ解説ノ中ニ“あるこハ多分藍草ノ意乎、其葉凋萎スレバ暗藍色ヲ呈スルヨリ云フ乎”ト述ベラレテ居ル。何レモ一理アル説ト思ハレルガ、私ハアイヌ語ト關係アルト思フノデアアル。

今其ノ書名ヲ確カニ知ツテ居ラスガ、多分、永田正方ト云フ人ノ著サレタ北海道蝦夷語地名解ト云フノデアアツタト思フ。コノ書ノ中ニアイオマナイトハイタシユナイト云フ地名ガアリ、前者ハ“蕁麻ノ澤”デ後者ハ“蕁麻ヲ取ル澤”ノ意デ、アイ・ハイハ蕁麻ノアイヌ名デ、ハハアノ變化シタモノデアアルト云フ。尙亦アイ又ハハイハ刺ヲ云フノデいばらモ斯克云ヒ、はりぎりノ如キハアイウシニト云フ由ガ記サレテ居ル。日本植物總覽ニヨルト北海道ニハ、いらくさ屬ノモノデハみやまいらくさ・ほそばいらくさ・えぞいらくさが産スルガ、蕁麻ナルいらくさハ産シナイ様デアアル。前述ノアイヌ語ノ地名ハ彼等ノ生活ニ密接ナ關係アルトコロカラ生ジタモノデアアラウ。ソレハ食用ニスルカ或ハ纖維用ニスルモノデアアラウト考ヘラレル。然リトスレバみやまいらくさハ最モ當ツテ居ル様ニ思ハレル。

秋田縣デハ能クイヲエト發音スル。例ヘバ井戸ヲエド又鳥居ヲトリエト云フ如キデアアル。從テあえハあいノ轉訛シタモノト考ヘラレル。次ニあいこ並ニあえこノコハ、コレモ亦秋田方言ノ一ツノ癖デアツテ、名詞ニヨク付ケラレルモノデアツテ、犬ヲ犬トカ草ヲ草ト